

小論文に隠された心の荒 廃をどうするか

●錦城学園高等学校教諭

酒井眞也

(さかい・しんや)

小論文の気になる変化

予備校で指導を受けている生徒の小論文は、さすがに完成度が高い。だがそれは型どおりに問題を「提起」し、そして用意された「個性」に基づいた「解決」を記述しているという意味であって、残念ながら生徒の本当の個性や意見が反映されているものは少ないようだ。入試小論文をとりまくそうした現状を全否定するつもりはないが、せめて正解主義的な発想から生徒を解放し、等身大の彼らを小論文上に引き出してみたいと考えてきた。

最近そうした正解主義的な小論文の背後に、本当の生徒像が少し見え隠れしてきたような気がする。昨今の生

徒たちの急速な心の荒廃が、小論文の内容や表現にも影響を与えているようだ。気になることなのであえてこたわってみたいと思う。

正解主義に隠された心の荒廃

昨今少年によるホームレス暴行事件が後を絶たない。生徒たちの考えを知りたいと思い、昨年「ホームレスと少年犯罪の関連についての新聞投稿を読み、意見を述べる」(国立大過去問題)という小論文を課した。次はあの生徒(三年・男子)の小論文の一部分である。

以上のように、私たちが通うような千代田区など都市部では、ホームレスを守るために三つの条例の制定が必要である。そのためには公園や歩道については、彼らの行動を区民全員で監視することが必要になる。これは簡単なことであり、今月実施された生活環境条例と同様効果をあげ、ホームレスを一掃できるだろう。しかし私は筆者と同様に条例の制定だけでは根本的な解決にはならないと思う。そのためにまず彼らの人権を次のように捉えることが大切である。(傍線筆者)

この小論文には、具体的な問題解決策がホームレス理解の立場から整然と書かれており、また説得力もあった。型どおりの添削をするならば充分合格点を与えられるものだといえる。しかし視点を少し変えてみると、気になる表現や奇妙な表現が目立ち、違和感を覚えた。例えば引用した箇所では、「ホームレスを区民全員で」「監視する」・（ホームレスを）「一掃できる」という表現が気になる。これらは単純に「見守る」・「救うことができる」という表現の間違いだろうか。少なくともこれらのことばの響きはホームレスを理解するという立場とは矛盾し、しかも不快な感じがする。

これは単に表現力の不足からくるものではなく、ホームレスを蔑視する発想のあらわれではないだろうか。その単純な疑問からこの生徒への添削指導がはじまったのだが、不幸にも予想はあたり、彼は「ホームレスは監視の必要な悪者で、街から排除すべきだと考えているが、それではうまく書けそうもないし、ホームレスに厳しい態度は印象が悪いだろうから書かなかった。この表現はあまり意識していなかった。」と発言した。結局ホームレスを理解するという小論文の立場は本心ではなく、彼の考える「正解」に過ぎなかつた。こうした発想をする

生徒は珍しくないが、日ごろこの生徒は特に素直でやさしいと思っただけに驚かされた。彼のそのようなホームレス観を改めさせるのにはかなりの時間を要した。

これはあくまで一例である。特にここ数年偏差値とは関係なく、こうした発想や悪質な盗作（急増している）などが小論文に少なからず認められるようになってきた。さらに、心の「荒廃」とも思えるものがあらわれている文章も増えている。しかしそれらはふつう正解主義の「型」に隠されており、それ故に従来の添削の視点では見過ごしてしまう可能性が大きいし、また問題視されないことも多いようだ。

新たな視点で生徒の価値観と向き合おう

ではこうした小論文を前にして私たちは何を考え、どのような添削指導をするべきだろう。いずれにせよ正義に隠された生徒の発想や価値観を読みとり、あるいは心の荒廃を理解した上で、生徒の心と対峙することがまず最初に必要となるだろう。添削指導において教科の領域を越えた精神分析のようなものを主張するつもりはないが、実際に小論文には生徒の内面のヒントがあり、

今後そうした視点なしには小論文の分析・添削は難しいと思われる。従ってホームレスを蔑視するような生徒に對しては、添削に先立ち、そのホームレス観そのものについて、さらにそれが本文の論旨と矛盾していることの意味について、話し合いが充分に必要であり、それを足がかりとして添削指導を進めていかなければならないだろう。

そしてそれには当然のごとく、正解主義的な小論文指導を否定する立場が前提としてなければならぬ。私たちは口先では正解主義を否定しながらも、いまだに正解の「型」を押しつけているのではないだろうか。ミニマムな視点での添削指導の試行錯誤は、逆に生徒の執筆意欲を抑圧し、結局いびつな小論文を生みださせることになっっているのではないだろうか。小論文指導の現状においては、何が正しい指導かという判断は確かに難しい。だが、生徒の小論文を分析すれば、自分の反省の何かはそこに辿りつくはずだ。

小論文指導の方法は、今後入試の合否以外の視点からも問われてくるものと思われる。しかし正解主義的な発想から解放されたところで、ユニークな新しい指導の方法を構築していけるとするならば、そこには小論文指導の新たな可能性が生まれるだろう。原点に戻り、小論文

を通じて生徒に学んで欲しいことを再確認し、新たな指導方法を模索したい。